

サビエル生誕五百年



藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

被災地とオリンピック

〜三たび大槌を訪ねる⑤〜

東京オリンピック・パラリンピックが決定した瞬間、自分でも驚くほど興奮して喜んだ。寝ていた妻を起こし、涙しながら決定を伝えた。それは、日本全体を覆っていた閉塞感を吹き飛ばしてくれたような気持ちになつたからだろう。

被害が出た。自然災害だけではなく、長く続く不況感、尖閣や竹島などアジアとの関係などが暗雲のように垂れ込んでいる。

個人的にも七十歳を超え、老いることから来る閉塞感。自分だけではない、国民の四人に一人が六十五歳以上の高齢社会。しかし七

しい一つの輝いて生きる目標のようなものにも思えた。

が、次の瞬間、東北の被災地のことが頭に浮かび「オリンピックが悪いというのではない。喜ばしい。しかし震災から二年半が過ぎたのに、一向に進まない復興。自分たちはいつまでこんな生活を送らなければならぬのだらう」そんな被災者の声が聞こえてくるように思えた。

少しでも被災された人を励ませればと、毎回、ケーキを焼いて届けた。そのような行為が無駄だったとは思わない。しかし今、心にある空しさ。それはボランティアの領域を越えたものだが、被災者のほとんどが二年以上過ぎた今も日常生活すらできていない現実。そして遅々として進ま

ない復興を今回もまた自分の目で見たからだ。

被災者の九割を超え、人たちが不便な仮設住宅住まい。自分の生活と比較して一番の違いは「被災者は今も通常の日常生活を生き延びて



さら地になった町の中心に一軒だけ残る被災のままのパチンコ店

津波に対しては安全かもしれないが、不便な日常生活でない仮設のまま生涯を閉じることになるのではないかと。素人考えであることは百も承知だ。しかし一刻も早く被災者に通常の暮らし、日常生活を生きる希望を与えてあげねば。

そして非日常のスポーツの祭典、オリンピックをとともに楽しみたいと願う。

一面に野草が咲くさら地、復興住宅が建つのは…

私の素朴な疑問は、なぜ高層復興住宅が全く建設されないかということだ。

大槌の我々ボランティアの宿舎は被災地の中心にある旧ビジネスホテルだ。四階建ての建物の三階窓下まで津波に襲われたことは何回か報告した。二年半が経過しているのに、宿舎から見るところには一軒の建物もない。広大なさら地。一方、不便な小高い仮設住宅で出会った高齢者。



一面に野草が咲くさら地、復興住宅が建つのは…